

前期：現代キリスト教思想研究1——近代から現代へ

オリエンテーション——現代キリスト教思想の諸動向

1. 西欧近代とキリスト教
2. 自由主義神学1——シュライアマハー
3. 自由主義神学2——リッチェルとハルナック
4. 自由主義神学3——トレルチ
5. ヘーゲルとヘーゲル主義
6. 近代聖書学と宗教史学派
7. キリスト教と社会主義 6/6
8. 弁証法神学1——バルト 6/13
9. 弁証法神学2——ブルトマン 6/20
10. 弁証法神学3——ティリッヒ 6/27
11. 解釈学的神学とブルトマン学派 7/4
12. 研究発表：岡田勇督、齋藤伎璃子 7/11
13. 研究発表：山田奈緒美、張旋 7/18
14. 研究発表：山下毅、山本恵美 7/25

<前回>ヘーゲルとヘーゲル主義

(1) ヘーゲル哲学の意義

1. ヘーゲル哲学の魅力あるいは意義
2. 三位一体論的哲学

(2) ヘーゲル主義の系譜

3. ヘーゲルの総合とその破綻、学派の分裂。実存の思想群。

(3) バウル(Ferdinand Christian Baur, 1792-1860) とテュービンゲン学派

5. 森田雄三郎『キリスト教の近代性』第三章「歴史的運動としてのキリスト教」
6. 第二期、二つの研究方向（思弁的方法の強調のもとに歴史全体の把握をめざす教理史研究と、歴史的批判的方法の強調のものに原始キリスト教を遡源する実証的研究）。「じつは根本的に同一の方法」（113）
7. 「精神史としての教理史」、「教理史とはドグマ(Dogma)の運動の全体」（114）
ドグマの弁証法的運動としての教理史＝ドグマについて思惟する主観的運動
・ヘーゲル哲学の枠組みのキリスト教史・教理史への適用、ヘーゲル哲学と近代歴史学の予定調和。「結果」と「意図」のずれ。
・宗教改革の解釈：たんなる根源的なものへの復帰ではなく、「自由の意識」
「ドグマの絶対的な確かさが主観的意識においていま一度問いなおされるのである」、
「宗教改革と歴史理解とは必然的に共属する」（116）、「宗教改革以降、神学は未完結の歴史運動をつづける批判的学問へと発展し、ドグマの客観性は主観的客観性となったと、バウルは考える」（117）
7. 「聖書自体をして聖書を語らせる」、「それがためには聖書はまず伝統的権威から解放されて、歴史的資料とならなければならない」、「第一の歴史的資料として聖書研究から第二の聖書の精神の理解へと進む手続きが、歴史的批判である。かくて歴史的批判を実行しない者はプロテスタンティズムの敵であるとまでバウルは語るのである」（122-123）

8. 「自由と絶対的依存の相互否定的媒介は、絶対的精神の働きにおいてのみ成立するのである」、正統主義神学と合理主義的神学の一面性。
9. 「原始キリスト教の遡源的研究」、マタイ→ルカ→マルコ
10. 歴史（人間、共同的生の活動領域）という問題の地平におけるキリスト教思想。
しかし、歴史的思惟自体が、複合的であり、錯綜している。
歴史的批判的方法、ヘーゲル主義、そしてグリム（物語としての歴史）

6. 近代聖書学と宗教史学派

(0) トレルチ・宗教史学派の神学

7. 「教會的神学から自由な宗教哲学に正しく基礎づけられたキリスト教神学」、「教會的伝統から全く自由な立場において近代的学問意識において正しく位置づけられた神学」の構想（佐藤、169）、シュライアマハー、リッチェルの線上。
8. 歴史的方法の特徴：方法、認識、存在、歴史主義
・批判（Kritik） ・類推（Analogie） ・相互作用（Wechselwirkung）あるいは相関（Korrelation）

「歴史的方法、歴史的思考法、歴史的感觉」「真の近代的歴史」

「第一は歴史批判にたいする原理的習熟であり、第二に類推の意味であり、第三はあらゆる歴史的的事象間に生ずる連関がそれである。」(10)、「蓋然性の判断」(10)

「批判を始めて可能にする方法は、類推を適用すること」、「類推の全能とは、あらゆる歴史的出来事の原則的同質性を含むものである」、「聖書批評自体もまた諸伝承の類推によって成り立っている。」(11)、「歴史的生のあらゆる現象の相互作用」、「すべての出来事が恒常的な相互連関のなかにあり、全体も個体も互いに関連し一つの事象が他のものと関係しつつ、必然的に潮流を形づくることになるのである」、「われわれ自身の追体験能力」(12)

9. 「宗教史学派の教義学」(Die Dogmatik der "religionsgeschichtliche Schule", 1913)

↓

伝統的な教義学の解体、『信仰論』

(1) 近代聖書学

1. パネンベルク「聖書原理の危機」(1963年の講演)

「テキストの思想世界と現代の思想世界との隔たり」、「聖書の諸文書は矛盾なく内容的に一致しているという意味での古い聖書正典(der biblische Kanon)の概念は、崩壊し去った。」(13)

「イエスの歴史と使徒たちのキリスト教使信との関連を視野から失ってしまった。」(14)

「事実と意味、史実とケリュグマ、イエスの歴史とそれに関する新約聖書の多様な証言、これらの間に断絶があることが現代の神学の問題状況の一方の面の特徴となっている。」(15)

「伝承された種々のテキストとわれわれが生きている現在との解釈学的差異は、その両者を結合する歴史を構想することによって保持されねばならず、かつまた止揚されねばならない」、「普遍史の問題」(19)、「包括的な歴史の神学の意味での神学の普遍性を更新するように押し迫ってくる。」(21)

2. 19世紀におけるイエス伝研究とその挫折(シュヴァイツァーの総括)→懐疑主義
・イエスは初期ユダヤ教の超自然的終末論的メシア王国待望に生きた人物、従来の倫理主

- 義的イエス観とは異なるイエス像。徹底的終末論（第15章～第21章、邦訳では中巻）
・先行する70人の研究者のイエス伝研究を取りあげる（ライマールスからヴレーデまで）。
・「第25章 結論的考察」

「否定神学について喜んで語る人々は、イエス伝研究の成果を顧ることに、困難を感じない。[彼らにとっては]それは否定的なものである。メシアとして出現し、神の国の倫理性を宣教し、天国を地上に創始し、そのわざに神聖さを与えるために死んだナザレのイエスは、けっして実在はしなかった。それは、合理主義によって見取図を書かれたり、自由主義によって生気を与えられたり、近代的神学によって歴史的な衣服を着せられたりした一つの形成物である。この像は外部からは破壊されなかった。それはそれ自体の内部において、次から次へと浮かび上がってきた事実に諸問題によって崩壊させられ、揺がされ、分裂させられた。」(304)

「合理主義神学や、自由主義神学や、近代的神学が築きあげたキリスト教の史的基礎は、もはや存在しない。しかしそのことは、キリスト教がそのために史的基礎を喪失したことを意味するものではない。史的神学が遂行しなければならぬと信じ、しかも完成に近づいた瞬間に粉碎されるのを見た研究は、あらゆる史的認識と弁明から独立の、真の、不動の史的基礎の煉瓦装飾にすぎない。というのは、この史的基礎はまさに現存しているからである。イエスはわれわれの時代にとっても、存在するあるものである。なぜなら、強力な霊的な流れが彼から発して、われわれの時代をも貫流しているからである。この事実は史的認識によって揺がされることもなければ、確立されることもないのである。」(395-306)

↓

では、聖書学の存在意義はないか。

(2) 宗教史学派

3. 「宗教史学派」(Religionsgeschichtliche Schule) : 1880年代の終わりにゲッチンゲン大学の教授アルブレヒト・リッチェル(1822-89)のもとに集まってきた若き学生の間で起こった学的運動。リッチェルに対立して新しい方向を目指して動きだした。その指導者は、アイヒホルン(Albrecht Eichhorn, 1856-1919)。この学派の主要な人物は、

William Wrede (1859-1906)、Hermann Gunkel (1862-1932)、Johannes Weiss (1863-1914)、Wilhelm Bousset (1865-1920)、Wilhelm Heitmüller (1869-1925)、Heinrich Weinel (1874-1936)、Hugo Gressmann (1877-1927)、Martin Dibelius (1883-1947)、Rudolf Bultmann (1884-1976)

指導者は、旧約のグンケル、新約のブーセット。神学者トレルチのこの学派に含まれる。

4. J. Weiss, *Die Predigt Jesu vom Reiche Gottes*, 1892.

W. Wrede, *Das Messiasgeheimnis in den Evangelien*, 1901.

5. 一般向きの学術層冊子の刊行（内国伝道的活動）

『宗教史的国民読本』(Religionsgeschichtliche Volksbücher)、旧約、新約、一般宗教史、教会史、世界観と宗教哲学の5部門+聖書講解（第6部門）

ブーセット『イエス』、ヴレーデ『パウロ』

6. 聖書の一般的講解シリーズ：

Schriften des Neuen Testaments, Schriften des Alten Testaments

7. R.G.G (Die Religion in Geschichte und Gegenwart) の刊行、第一版 1909-13

8. リッチェル学派：救済宗教としてのキリスト教(イエス・キリストの啓示→罪の赦し、

神の国→新約聖書。イエスの教えと人格＝キリスト教の福音)、罪の赦し(個人)と神の国(共同体)の二焦点楕円、神の国＝宗教と道徳の発展によって地上に実現されるべきもの・人間の道徳的努力の必要性。

↓

9. 教會的な枠組みからの脱却、諸宗教や文化の広い文脈から得られた材料と比較し関連づけてキリスト教を研究する。

言語学的・考古学的・比較神話的・比較宗教的方法

ヘレニズム的、東方的な諸宗教との比較：密儀宗教、グルーシス主義

10. 終末論的聖書解釈：ヴァイス

地上的・発展的・道徳的秩序に立つ神の国

→ 超越的・奇跡的・突発的な神の一方的な働きによる神の国

11. 文体的・類型論的研究：様式批判、グンケル→ディベリウス、ブルトマン

資料仮説：ヴェルハウゼンの J、E、D、P

二史料仮説

12. 「神学的・教義学的解釈を退けて、聖書の各文書を歴史的・時代史的に見、同時代または先行する時代と比較しつつ、影響を尋ね、文書や思想の系統を捕えつつ歴史的・宗教史的に解釈してゆく」(38)。

13. 宗教史学派の神学

- ・キリスト教は宗教史の発展の最終段階、諸宗教中の最高の位置。
- ・キリスト教はイエスにおいて啓示された神の恵みの上に立てられた人格的宗教。イエスの人格の上に築き上げられる自由な福音。個々の人格に無比の意義を認めると共に、団体を重視する。
- ・キリスト教は昔のままの姿を保つことは出来ない。救済宗教、道徳宗教であるが、その信仰内容は時代的な変化を受ける・キリスト教は発展的である。変わらないのは、イエスの人格と福音である。

↓

歴史主義的。楽観的な人間理解。

近代キリスト教神学の到達点。

<参考文献>

1. 『聖書講座』(第一、二、三、四巻)日本基督教団出版局、1965年。
第四巻：山谷省吾「聖書解釈の歴史(十九世紀まで)」「宗教史学派の聖書解釈」
2. P.シュトゥールマッハー『新約聖書解釈学』日本基督教団出版局。
3. 出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史 新約聖書から宗教改革まで』日本基督教団出版局、1986年。
4. ゲオルグ G. イッガース『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房。
5. トレルチ「神学における歴史的方法と教義的方法について」、『トレルチ著作集2』ヨルダン社。
6. パネンベルク『組織神学の根本問題』日本基督教団出版局。
7. A. シュヴァイツァー『シュヴァイツァー著作集』白水社。
第十七、十八、十九巻『イエス伝研究史 上中下』(遠藤彰、森田雄三郎訳)
・賀川豊彦『基督伝論争史』警醒社、1913年。
第一篇がシュヴァイツァーの『イエス伝研究史』の抄訳。